

動(al-haraka al-jawhariya)」の説は一般には不変とされる範疇である実体の変化を主張し、難解をもって鳴るが、それは人間靈魂が自由に変容を経て、存在の階梯を上昇し、やがては神のもとに帰還するという説であると説明した箇所はまさに見事であり、著者によらずして日本語では明晰に表現出来なかったものと言えよう。本書は著者の長い研究活動に立脚して満を持して発表されたものと思われる。

纏めれば、本書はイスラーム概説書として最初に手に取るにはやや難解であるが、その思想に興味を抱く人が二冊目か三冊目に一読すれば、イスラームの概説を経てイスラーム神秘思想の「深層」への入門を果たすこととなろう。またともすれば特異なものとみられがちな神秘思想をイスラーム自体に、サッラージュやガザーリーなどスーフィズム自身の論理によって位置づける試みも説得力があり、類書には例が少ないものであろう。評者も本書のその方法には学ぶところが大きかった。ここからイスラームに関わる分野の専門家にも神秘思想についての知識を整理するのに良いと考えられる。本書が初学者から専門家まで広く読まれることを望むものである。

最後に本書の内容の中から、評者にはさらに議論が欲しい箇所について、評者の専門を踏み越えることだが論じてみたい。まず上述のように、著者はキリスト教とイスラームの神秘主義の対比概念として、「排他的神秘主義」と「包摂的神秘主義」を挙げている点である。これらに加えて、評者は、著者がその流出論がイブン・アラビーやスフラワルディーに大きな影響を与えたとする(第五章)、新プラトン主義の視点を加えると、さらに対比が包括的に議論出来るのではないかと考える。新プラトン主義は両宗教に受容された思想であり、両宗教それぞれの教義や思考法の相違からどのようなヴァリエーションが出てくるかが問題にできるからである³⁾。例えば、自然的なプロセスの叙述とされがちな新プラトン主義の流出論が、一神教の神の意志による創造説とどのように関係づけられるか、それがイスラーム、キリスト教のそれぞれでどのように現れるのであろうか。これはそれぞれの宗教で多くの研究の蓄積があるだろうが、それらを比較して考察することも可能であろう。

さらにもう一点。著者はイスラームと日本の宗教の意外な近しさの例として、神道の神社で日本人が願掛けなどで祈る際には、いちいちその祭神ではなく、その背後にある超越的な「何らかの存在一般」、一神教的な神的なるものを対象とするのではないかと問いかけている。これは正しく日常から思い当たることも多い説得力のある指摘であり、評者も目から鱗が取れる思いがした。だが同じく日常の経験から、願掛けの対象として特定の「学問の神様」など、「～の神様」に祈ることがあるという指摘もできる。詳しい議論は評者の能力を越えるが、この祈りの対象の問題については、時代や、祈りを行う個々人の知識、各神社の祭神の性格によっても細かく見ていく必要があるだろう。

以上の二点のことを検討すると、評者から見てさらに議論が欲しい点も、その反面、本書が読者を考察に誘い、議論とさらなる探求に導くものであること、つまり、イスラームとその神秘思想の見方の考察には生産的な力を持っていることを示しているように思う。イスラーム思想について新たに考える材料を求める人にも本書をすすめたい。

(野元 晋 慶應義塾大学言語文化研究所教授)

東長靖、今松泰『イスラーム神秘思想の輝き——愛と知の探求』(イスラームを知る 15) 山川出版社 2016年 112頁

戦後以来の日本におけるイスラーム世界研究において、研究者の人数、よって発表される論文・著作の数において、歴史学が極めて多かった。しかし四半世紀前頃より、宗教・思想・文化人類学など様々な分野

3) これに関して、評者の専門外になるので難しい問題でもあるが、キリスト教思想史においては新プラトン主義の流れを汲む、たとえ神秘主義の主流を形成しないまでも、影響力の強い神秘思想家たちがおり、一元論的傾向を持ち世界観的・宇宙論的「包摂性」を示す思想を展開してきたことを指摘したい。例として、擬ディオニュシオス(6世紀)、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ(810頃-877頃)、マイスター・エックハルト(1260頃-1328頃)、ニクラウス・クザヌス(1401-64)、ヤーコブ・ベーメ(1575-1624)などが挙げられよう。中には正統教会から異端視され、断罪される者もいた。イスラームとキリスト教の神秘主義のそれぞれにおける「排他的神秘主義」と「包摂的神秘主義」の関係については、評者は引き続きもう少し考察して、将来、別の機会に論じてみたい。

においても陸続と優れた研究者・業績が現れだし今日の盛況に至っている。山川出版社より刊行されている《イスラームを知る》シリーズは、日本のイスラーム世界研究者が結集した「NIHU (人間文化研究機構) イスラーム地域研究プロジェクト」の成果の一つであり、初学者を対象に想定して、しかし一般向けというよりは専門的な知識を解説した叢書である。このシリーズの1冊に収められた本書は、上記のように日本における研究の拡充を示すとともに、日本にとどまらず世界におけるイスラーム思想研究の進展を象徴するものである。

近年、日本において学界のみならず、一般的にもスーフィズムの存在が知られるようになり、出版・放送・インターネットなどの様々なメディアにおいて取り上げられるようになってきた。しかし一方でスーフィズムを単純に神秘主義の訳語の字義どおりに平板で表面的な理解にとどまっているものも少なくない。こうした状況下中、本書はより深くスーフィズムの実態への理解を深めるべく、多角的な側面から検討・著述を試みるものである。

共著である本書の構成は、まず前半の第1章から第3章まで、スーフィズムを位置づけて、愛と知に特化してその理論的側面を説明する部分を東長が、次いで後半の第4章から第7章まで、歴史のなか、主として10世紀以降にトルコ族が東方からイスラーム世界に流入してから、オスマン朝の時代におけるスーフィズムの実際の歴史的展開の側面について今松が執筆担当している。

前半、まず第1章「スーフィズムとは」において、俗説に言われるスーフィズムをイスラームの分派であることを明確に否定し、著者が長年の自身の研究に基づき提唱するスーフィズムの三極構造論を解説して、スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象に基づき、三つの現象を相違点と共通点を含めて検証対象とすることの重要性を指摘する。そのうえでスーフィズム史の時代的変遷区分を示す。

第2章「愛を求めるスーフィズム」では前述のようにスーフィズムをイスラーム思想史のなかで理論的に位置づけるために、愛について取り上げ、神への畏れ、神への愛との比較の中で、神の存在を、人を憐れみ慈しむような存在として観念化することがスーフィズムを成立させる根底であることを明確に示す。そのうえでイスラームでは神と人間との間の愛を主張し、愛する者と愛される者の関係性、すなわち神だけが存在する以上、愛する者も愛される者も神にほかならないことを結論付ける。著者の指摘のように、こうした考え方は明治時代以降われわれ日本人には馴染みが薄いがゆえに明確に整理をすることでわれわれのスーフィズム理解を深めてくれる。そのうえで恋人とワインというイスラームの詩文学で好んで用いられる比喩が、スーフィズムにおける愛の存在を称揚する存在であり、さらには人類に普遍的な真理を目指すために用いられていたかを説く。その延長上に、芸術・芸能とスーフィズムが深く結びつき、高尚な者にとっての芸術ばかりでなく、一般民衆の好む芸能としてスーフィズムの考え方が広まっていった流れを説明する。

第3章「知を求めるスーフィズム」では第2章と対照的に知識と結びつくスーフィズムの存在が論じられる。スーフィズムが人間の完成への道程を示すものであるがゆえに、倫理学と結びついていること、さらには、心のありよう(心的境地)に注目するならば、心を研ぎ澄ます修業は、心理学とも結びついていることがわかると述べる。そのうえでスーフィズムが用いる「イルム」と「マアリファ」の用語の違いを説明して、スーフィズムが後者、すなわち体験を通して体得する知を重んずること、知る者と知らされる者と知そのものが一つであることを説明する。そのうえで神秘主義としてのスーフィズムについて、光の問題、さらにイブン・アラビーが「アッラー以外に存在はない」と唱える存在一元論について解説して、究極的な「完全人間」の存在を説明する。

後半に入り、まず第4章「フロンティアと混沌の世界」では、10世紀前半からトルコ系遊牧民がアナトリアに流入して、同地でルーミーとクーナウィーに代表されるコンヤで活躍した思想家を説明する。そのうえで遊牧民の流入とともに当方から移住してきた「パバ」の存在の重要性が指摘され、さらに彼らと並んでカラダルと総称される遊行デルビーシュが大きな影響を与えたことを述べる。こうしてイスラーム世界に12～13世紀から数多くのタリーカ(教派・教団)が成立し始め、メヴレヴィー教団・ベクタシー教団などアナトリアで形成された教団について詳説される。やがてオスマン朝が成立してアナトリア、イスラーム世界の政治状況が一変する中であっても、教団の成立・流入は継続し、新たなシルスィラ(道統)が形成されていくことが述べられる。

第5章「スーフィズムを取り巻く環境の変化」では、15世紀半ば、オスマン朝がイスタンブルに首都を構えるようになってなお、スーフィーの伝統が首都に進出し、さらにバルカンにまで広まっていくことが指摘される。そうしたなかでベトレッディンなどが新しい宗教運動をおこし、異端問題を起こすまでに至った。加えて15世紀後半からアナトリアで起こったクズルバシュ問題がオスマン朝を揺るがし、スンナ派の盟主としてサファヴィー朝と対峙し、彼らを弾圧していく過程が説明される、さらにウラマーとスーフィーとの間の軋轢についても詳説される。

第6章「タリーカの隆盛と論争」では、ジェルヴェティー教団はじめ17世紀以降のタリーカのさらなる隆盛が説明される。そうしたなかでイブン・アラビーの思想的伝統がいかに重要な役割を果たしていたかが指摘され、さらにその著作の注釈がトルコ語で記されることが広まっていったことが示される。そうしたなかで突如としてタリーカを標的にしたカドゥザーデ派の運動がおこったことが詳説される。

第7章「成熟の時代から近代化改革の時代へ」では、カドゥザーデ派の運動が過ぎ去った18世紀以降の状況が整理される。この時代もタリーカの流入と発展は続き、思想や文芸面においてスーフィズム文化の成熟が見られた。続く19世紀においても新たな教派・教団が起こり、新しい発展の方向性が示さることとなった。しかし同時にスルタン・マフムト2世期に国家による統制と管理が顕著になり、ベクタシー教団が閉鎖されるなどの事態に陥ったことが説明され、さらに20世紀に至ってオスマン朝にかわりトルコ共和国が成立すると、1925年にテッケが閉鎖され、タリーカも公的に閉鎖されるに至った。しかしながらタリーカは完全に消滅したわけではなく、今日もなお姿かたちを変えて存続し、政治的な影響力をもつものさえあることが示されて擱筆される。

以上のような構成で、スーフィズムについて、前半の理論的側面と後半の歴史的側面とによって、すなわち二つの視点からその全体像をひととおり略括している。おそらくは両著者とも承知の上で執筆されているのだろうが、本書だけでスーフィズムのすべてが完全に理解できるものではない。冒頭に示したように、本書は、所収される《イスラームを知る》シリーズの一環として、最新研究に基づき記された概説書であって、両著者の長年の専門研究のエッセンスである。スーフィズムについてのさらなる深い議論は本書に所収される参考文献に示される両著者の著作をはじめ、数多くの著作を参照する必要がある。むしろ従来まで思想研究と歴史研究が乖離していた学問的状况を顧みれば、本書のように両者が協力して、スーフィズムの理論と歴史を結び付けて説明しようとする試みは高く評価されるべきである。

また従前まで、トルコの思想研究はトルコ語という執筆言語の問題もあってイスラーム世界の思想研究のなかであまりきちんと評価されてこなかった傾向がある。本書はそうした状況に一石を投ずるべく、アラビア語・ペルシア語・トルコ語（オスマン語・現代トルコ語）に精通した両著者が、中世から現代にいたるイスラーム世界の中心的存在であったオスマン朝（およびその後継国家であるトルコ共和国）のなかで、イスラーム世界におけるスーフィズムの動向を経括したしたものとして、極めて高い価値を有するものである。

2016年7月15日、失敗に終わったものの、トルコ共和国において世界を震撼させたテロが起こり、その影響は現在も継続している。いまなお経緯はまだ完全に明らかにはなっていないものの、トルコ共和国の現政権（イスラーム主義政党であるAK（公正発展）党政権）はテロの背後にトルコさらには世界で活動するタリーカが存在を指摘している。スーフィズムへの理解は、単に思想研究にとどまらず、歴史・社会・政治を理解する上においても必須である。そのための基本的な視座を提供してくれる本書は極めて有益な入門書となるであろう。

（三沢 伸生 東洋大学社会学部教授）

加賀谷寛著、松村耕光・東長靖・山根聡・今松泰・仁子寿晴編『加賀谷寛著作集』京都大学イスラーム地域研究センター 2013-2015年 全3巻

インド・ムスリム研究を志す者にとって、加賀谷先生のご研究は今なお必読文献である。しかし今日改めて先生のご論文に接しようと思えば、単行本として刊行されていない著作については、古い紀要や学会